

腐り切った組織の実態を継続してウォッチする 第六十五弾

神社本庁再生への道—その二十八

田中—打田体制の多大なる負の遺産を背負った神社本庁—正常化は神道人の大使命

神社本庁再生へ向けての胎動が起こりつつあるようだ。やっという気もするが、一旦動き出せば付和雷同して、大きなうねりへと急成長してゆくのが、良くも悪くもわが国民性というものだ。

しかし、大半を占める付和雷同の部分は本物ではない。とは言え、彼らは、改革や正常化にとって大切な存在である。人を感化し、変えて行くことができなければ、正常化は出来ないからだ。儒夫をして立たしむる言葉と行動が、今こそ求められているのだ。

鷹司統理の不退職の行動の意味するところを、神道人の魂を揺るがす言葉として表現し、伝えてゆかなければならない。これは本来、神社本庁の役目であるが、それが望めない今、渾身の力を込めて、その代役をとめよう。

ウソとヤラセの田中—打田体制暗黒史

その前に、田中—打田体制による空前絶後の事跡を振り返ろう。田中氏が神社本庁総長の地位に着いたのが平成二十二

藤原登(フリーライター)

年、打田氏が神道政治連盟の会長に就任したが、平成二十八年度である。同年を以て、田中—打田体制が確立されたと思えてよいが、奇しくもその年は、前年の百合丘職舎の売却をめくり、不正疑惑が露呈した年であった。以来田中—打田体制は、懲戒処分を行い、ウソの職員訓示を行ったことについて、謝罪しようとするほど、隠蔽と不正を重ねるしかなくなり、当時すでに、今日の見るも無惨な状況が約束されていたと言っていた。それでも、彼等の周辺では相も変わらず利権の臭いが漂い続けていたが、今回はまず、これまで詳しく触れなかつた田中体制暗黒史の一部を紹介する。

▽ウソだらけの総長訓示
神社本庁が全面敗訴した職員地位保全裁判で、原告となった稲貴夫、瀬尾芳也両氏は、平成二十九年七月に自宅待機となり、翌月に懲戒処分を受けたが、田中総長はその前後に二回にわたり、職員全員を講堂に集めて訓示をしている。そこでは、「怪文書への関与を認めた

が、話を総合すると、少なくとも二名の職員が関与し、現在も神社本庁に勤務しているようだ。
理事選挙、総長選出で暗躍した荒井総務部長
続いて、現在の田中派子飼いの職員筆頭とも言える人物を紹介する。神社本庁総務部は、役員会や評議員会の事務を司る神社本庁の要の部署である。故にこれまで、小野崇之氏(宇佐神宮宮司)、真田宜修氏(明治神宮御直)など、田中派のエリート職員が総務部長の職に就いてきた。その論功行賞である天下り先の神社の幹旋も、当然ながら田中体制の重要な仕事であった。

現在、総務部長を勤める荒井実氏は、真田前部長の後任として平成三十年四月からその職にあるが、令和元年五月の評議員会理事選挙と、昨年五月の総長を決める臨時役員会において、神社本庁の混乱が現在まで拡大継続する上での決定的な役割を果たした。

令和元年五月の評議員会での理事選挙委員会では、定数四の全国理事に五名の候補者がいたため、選挙委員による投票となった。投票の場合、単記式がそれまでの慣例であったが、このときは荒井総務部長は連記式の前例があると発言し、委員長が強引に四名の連記に持ち込んだため、正常化の使命を帯びて

全国理事候補になった吉田茂穂氏(鶴岡八幡宮宮司)には、事前にも示し合わせていた田中派委員の票が入らず、選挙委員の人数では勝る反田中派の投票行動は割れてしまったために、吉田氏は落選した。因に連記投票の前例は、荒井総務部長の確信犯的ウソ発言の可能性が高い。

そして昨年の総長を決める臨時役員会では、「役員会の議を経て、総長が指名する」との規定に従い、鷹司統理が総長に芦原高穂理事を指名、続いて副総長に西高辻理事を指名して閉会になる直前、荒井総務部長が突如、「役員会の議を経て」とは、議決を要すると発言したので、これが今日に至る総長問題の発端である。ありもしない前例や議決を捏造した上で強引に適用し、混乱を拡大させてきた荒井部長の罪は深い。現在の田中体制を支える上では最大の功勞者と言つてよい。

なお最近、有力な田中派理事の一人である鍵三夫氏が宮司を支えている神社本庁組織の中核に、いまだ陣取っている。彼ら長年奉仕していた六十代の権宮司が退任した。田中体制を五年間支え続けてきた宮城県出身である荒井総務部長の天下り先確保の環ではないかと、地元で噂されている。

昭和二八年、東京に生まれる。昭和五二年、専門学校卒業後、広告代理店勤務の傍ら、独学で歴史、宗教、哲学を学ぶ。現在は同人誌を中心に寄稿している。

神社本庁の正常化へ神道人の使命

人は何のために生きるか。この設問に正面から回答するのは難しい。それでも筆者が常々考えていることは、生きることに目的はどうでもよい、生きていく過程そのもの、要するに人間としての生き様が大切であるということだ。そして、日々の生き方を素直に見つめれば、争いのない豊かな、老若男女が共に支え合う生き生きとした社会の実現という、個人を超えた広い世界へと心も解放されてゆく。表現こそ違え、私が師と仰いでいる神道人の方々も同じ趣旨の話をよくされる。これを神道的生き方と言つても間違いではないと思う。

翻つて、神社本庁正常化のために鷹司統理が日々対峙している面々は、先に記してきた輩である。とても神道人とは思えない田中一派が、全国の神道人が支えている神社本庁組織の中核に、いまだ陣取っている。彼ら長年奉仕していた六十代の権宮司が退任した。田中体制を五年間支え続けてきた宮城県出身である荒井総務部長の天下り先確保の環ではないかと、地元で噂されている。

藤原登(ふじわらのぼる)

昭和二八年、東京に生まれる。昭和五二年、専門学校卒業後、広告代理店勤務の傍ら、独学で歴史、宗教、哲学を学ぶ。現在は同人誌を中心に寄稿している。